「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
（当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください）

	平成 28 年 10 月 05 日
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏　名	井上　漱太

１．派遣国・場所（○○国、○○地域）

愛知県犬山市霊長類研究所

２．研究課題名（○○の調査、および○○での実験）

比較認知実習

３．派遣期間（本邦出発から帰国まで）

平成 28 年 9 月 5 日　～　平成 28 年 9 月 7 日　（3 日間）

４．主な受入機関及び受入研究者（○○大学○○研究所、○○博士／○○動物園、キュレーター、○○氏）

霊長類研究所 友永雅己教授

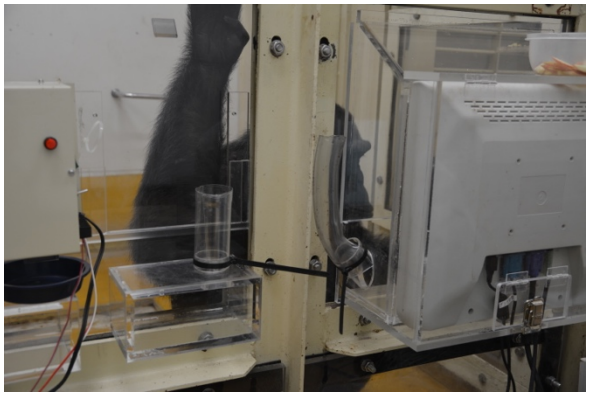
５．所期の目的の遂行状況及び成果（研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由）

写真（必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの）の説明は、個々の写真の直下に入れること。
別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

今回の比較認知実習ではタッチパネルを用いたチンパンジーとウマの認知実験をメインで行った。実習中にチンパンジーに与えられた視覚課題は、キャベツの新鮮さを見分ける課題、黒い丸の数が多い画像を選択する課題、ゴリラ、チンパンジー、オランウータンの顔を区別する課題などがあった。ほとんど言葉の通じないチンパンジーがいかにして、課題を遂行していくのであろうか。単純な課題である黒丸の多い画像を選ぶ課題について考えてみたとき、素直に考えれば黒丸の数を数え挙げればいいだけと思うかもしれない。しかし、それは我々人間のみに当てはまることかもしれない。彼らは黒い部分の面積を捉えているかもしれないし、黒丸をつなげてできる図形を基準に課題をこなしているかもしれない。また、少し複雑な課題である新鮮なキャベツの選択では、立体感、画像の明暗や筋の張りなどを基準にしているかもしれない。実際のところ、彼らが何を基準に選択しているのかはわからないが、課題を細かく調節していくと分かることもあるはずである。チンパンジーの認知についてじっくり考えてみると、我々が普段何気なく見ている世界の捉え方は一通りではなく、動物たちのことを知ろうと思えば頭を柔らかくして人間基準で考えないことが重要な要素であると感じた。

もう一つ大きく印象深かった出来事があった。チンパンジーが課題に積極的に取り組んでいることであった。彼らには課題遂行への拒否権も与えられているし、スタッフも決して厳しい言葉を投げかけたり、怒ったりすることはないが課題へ取り組むのである。確かに課題に正解すれば餌であるりんごが与えられるのは間違いないが、量を考えれば微々たるものである。彼らの気持ちはわからないが、そんなに大きなモチベーションを与えるものではないのではないように私には思えた。。学習を通した何かを上達させていく喜びや達成感のようなものを感じているのであろうか。もしくは、課題に取り組むこと、頭で考えること自体がモチベーションとなっているのであろうか。これもなかなか答えがわかるものではないのかもしれないが、少しでも解き明かされればと思う。

この他にもリズム同調の実験やじゃんけんの課題、傾きを認識する課題などを見学したがどの課題も単純なように見えて、その裏で非常に細やかな狙いや配慮が伺えた。どうすればやる気を損なうことなく、スムーズにステップアップして難しい課題に取り組むことができるか、見たいことが見えてくるか、実験設計の重要性を感じた。



課題に取り組むチンパンジー

課題に取り組む実習参加者

６．その他（特記事項など）

今回の実習にて指導してくださった友永教授、その他スタッフの皆さん、PWS プログラムに感謝します。